

No. 342【2019年2月1日配信】

青浦商会 (担当: 工藤)

こんにちは! 室長の工藤です。

ちょうど110年前となる明治42年(1909)の9月、北山一郎という人物が「合資会社青浦^{せいほ}商会」を設立し、自ら社長となりました。会社名の「青」は青森、「浦」はロシアのウラジオストクで、「青浦商会」は青森とウラジオストクとの貿易を行った会社です。

社長の北山一郎は県議員を4期16年務め、昭和5年(1930)には青森市長を務めるなど、長く政治の世界に身を置いた人物です。その北山が実業界に飛び込んだのは「大なる政治家は同時に大なる実業家でなければならぬ」(『北山一郎自叙伝』)という信念に基づいた行動だったようです。



北山一郎
(青森県立青森盲啞学校
『県立移管記念』、
昭和12年、歴史資料室蔵)

さて、青浦商会は本店を青森市に置き、支店をウラジオストクに置きました。大正15年(1926)の地図によれば、本店は現在の青森県立郷土館の北側にありました。これら本支店のほかに、敦賀と大連に出張所が設けられました。さらに、大正6年12月6日発行の『浦塩日報』に掲載の広告によればハルピンにも出張所があることが判明し、青浦商会の事業展開の一端が分かります。



青浦商会本店

(大正15年発行「大日本職業明細図之内青森県」、歴史資料室蔵)

青浦商会がウラジオストクへ輸出したのは県産りんごと雑貨で、輸入は農産加工品と毛皮などのほか、冷凍ニシンとサケ・マスを季節限定で沿海州方面から入手していたようです。輸出の主力となるりんごについて、青森港からのりんごの輸出額の推移をみると、明治42年～大正3年までは概ね順調に伸びています。もちろん、これらすべてがウラジオストクに向けられたものではありませんが、かなりの部分がそうであったとみられます。

ところが、大正4年から輸出額は落ち込みます。そして、この頃から青浦商会の営業にも陰りがみえはじめます。何故でしょうか？

大きな原因は第1次世界大戦とロシア革命にあったようです。事業報告書にはロシアの通貨ルーブルの下落で為替上の損失を受けたことが記されています。

また、シベリア地方に樹立された反革命軍（白軍）政府の「御用商」を青浦商会が担ったことが、結果的によくなかったようです。白軍との取引は掛売りで行われていました。青浦商会にとっては利益の大きな取引でしたが決済が先延ばしになり未決済も増え、ついに160万円余りが未回収となり経営上大打撃になったようです。後年、北山はこれを無事回収できていたならば「土俵際の大勝利」を得ることができたと振り返っています。

こうして社会の大きな変動に翻弄された青浦商会は、大正13年に営業休止となり、昭和3年若しくはその翌年に解散したものとみられます。